

# 建設的な労使関係構築に向けた 海外労使ワークショップの取り組み

## 労使ワークショップ 開催の背景

2009年、長期にわたる労使紛争がインドネシアに進出している大手日系企業において発生した。その労使紛争は、労働協約改訂に関する労使協議

が十分に進まない中で発生したものであり、4カ月間のストライキののち、日本のJCMと、関係産別、単組が連携して解決に向けた取り組んだことで解決に向かったが、労使紛争が一旦発生すると労使ともに大きなダメージを負うことになる。

が一堂に会する機会は全くなかった。私たちJCMは、日系企業の海外での建設的な労使関係を構築すべく、国内外で多くの取り組みを進めている。日本国内では企業別労使の対話だけでなく、ナショナルセンター連合と経団連の会談、各産業労使での労使対話、さらには各地域レベルでも労使対話の場を持つている。このようにあらゆるレベルでの労使対話が労使の相互理解を促進し、各企業レベルでの労使対話の環境整備の役割を果たしてきた。

## インドネシア 労使ワークショップ 開催までの道のりと成果

2013年7月、ジャカルタでの第4回労使ワークショップ冒頭、若松事務局長はインドネシアでの労使ワークショップ開催に到る道のりについて以下のように語った。

2010年6月に、ここMM2100で第1回の労使ワークショップを開催して以来、早いもので今回が4回目の開催となった。このワークショップを開催するまでは、インドネシアの日系企業の経営幹部と労働組合リーダー

インドネシアは、急速な経済発展とともに日系企業の進出も多く、労使紛争も増加傾向にあった。一旦労働争議が発生すれば、労使双方に多大な負担を強いるだけでなく、解決まで長い道のりをたどることになる。過去の経験を踏まえて、争議が起こる前に、労使の十分な話し合いで問題を解決する、そのような労使関係を構築できないだろうか？日本と同じように、インドネ



インドネシア労使ワークショップ 経営側代表およびJCM



インドネシア労使ワークショップ 労組側代表

建設的な労使関係構築に向けた海外労使ワークショップでの主な意見・要望

労働組合側	経営側
<p><b>インドネシア</b> 労働組合つぶしを行わず、最低賃金や派遣労働などの労働法を守ってもらいたい。</p>	<p><b>インドネシア</b> 違法行為や暴力行為は行わず、問題があれば話し合いで解決する姿勢を持ってもらいたい。</p>
<p><b>インドネシア</b> コンサルタントやインドネシア人人事労務担当の話は鵜呑みにせず、労使の問題解決のために、日本人経営者と労働組合が対話できる機会を是非とも作ってもらいたい。</p>	<p><b>インドネシア</b> インドネシア人人事労務担当は、自分たちが建設的労使関係構築のための鍵であり、その重要性を認識している。労働組合側との関係構築に努力したい。</p>
<p><b>インドネシア</b> 労働組合が過激な行動を取らざるを得ないのは、経営側が労働組合の要求を真摯に受け止めて対応しないからだ。</p>	<p><b>インドネシア</b> 労使が互いに尊重し、話し合いを重視する立場をとることが労使双方に課せられた課題である。</p>
<p><b>タイ</b> 最低賃金などの法律を守っていなかったり、労働組合つぶし行ったりする日系企業もある。</p>	<p><b>タイ</b> 労働組合は組合員の意見をしっかり集約し交渉に臨んでいるのか。また交渉結果を組合員にしっかり説明できているのか。</p>
<p><b>タイ</b> どうすれば高付加価値製品を作り、賃金を引き上げることができるか、労働者自身が能力開発を進めなければならない。要求だけでは会社と喧嘩するだけであり、労使の協力と対話が必要である。</p>	<p><b>タイ</b> 労働組合は賃金引き上げを要求するだけでなく、競争力を高める工夫を労使で取り組む姿勢を見せてほしい。</p>

シアでも労使のリーダーが一堂に会し、まずはお互いの考え方を表明し合い、その上でお互いへの要望を表明する場を作るのができないだろうか？そう考えた発想で我々はJJC（ジャカルタ・ジャバン・クラブ）とインドネシアの3つの金属産別組織に働きかけを行い、紆余曲折の末に第1回ワークショップ開催にこぎ着けることができた。

CMが海外で開催するのは初めての試みであり、その意味も含めて、歴史的出来事と言っても過言ではないと思う。結果としては、「やってよかった」と労使双方からは「やってみよう」という感想が大半であった。また、ジャカルタ新聞がこの労使ワークショップを大々的に報道してくれたこともあり、インドネシア日系企業経営者の方々の反響も大きかったと伺っている。多く

の経営側の皆さんは、ここに参加のFSPMIのイクバル委員長の顔も見たこともないし、考え方も直接聞いたことがないという状況だったわけで、労組リーダーの考え方を直接聞く機会は大変有益だったと思う。

ワークショップで出された要望意見

第4回労使ワークショップでは、JCMから建設的労使関係構築の意義とインドネシア日系企業の労使への期待を述べた後、経営側から労働組合への要望、労働組合側から経営への要望をそれぞれ率直に出し合う内容で開催した。第4回労使ワークショップでは参加者約120名中、経営側の参加者が半数を占めた。

第1回タイ労使ワークショップ

2013年2月8日、タイのレムチヤパン工業団地会議室で、JCM主催で、タイにおいて初の「建設的労使関係構築に向けた労使ワークショップ」を開催した。ここには、TEAM（タイ電機・自動車・金属労連）とALCT（タイ自動車労組会議）から108名、経営側から10名、JCMから7名など140名余が参加した。JCMから日本の労働運動の歴史とJCMの建



発言する経営者側参加者

設的労使関係構築に関する取り組みを報告、タイの労働組合2組織より労使関係に関する考え方と経営側への要望の後、パネル・ディスカッションを通じて、活発な意見交換を行った。

ワークショップの終盤では、「トップ同士が対話し、今後の方向性を決めて伝えていくべきではないか。このような機会に日本の経営者ももっと参加してほしい。実際に会えば、労働組合に対して抱いていたイメージが違うと言ったことがわかるだろう」と、労使双方から話し合いを通じて今後の方向性を作り上げていくことへの期待が提起された。最後の講評では、このタイでの労使ワークショップを今後も継続開催すること、次回は経営側からの参加を促進するために協力していくことを確認して閉会した。